

「おさしづ」第6巻における個人の身上・事情の伺いと「道」

『おさしづ改修版』第6巻(明治35～40年)における個人の身上・事情の伺いに現れる「道」の用例を整理する。第6巻には個人の身上・事情について伺われた「おさしづ」が94件ある。そのうち、「道」が用いられるのは57件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは24件である。伺われている身上や事情は、さまざまであるが、「道」の用例に注目して読むと、多くは同様のことを説かれているように見受けられる。ここでは、それぞれの個別の「おさしづ」の事情にはあまり立ち入らずに、「道」という言葉に込められた意味合いに着目して用例を整理したい。

道なら道のような事分けてこそ、道である

第6巻における個人の身上・事情の「おさしづ」のなかで、「道」という言葉が最も簡潔にして頻繁に繰り返し説かれているのは次の「おさしづ」である。

「道というもの、何分からいって道とは言えん。道なら道のような事分けてこそ、道である。」(さ37・9・26 仲田権吉 四十一才身上願)

この短い言葉を一読すれば、「道」の通り方について、強いメッセージが込められていることはすぐに感じられる。ここに言われていることが分からなければ、道を通っているとは言えない、と言われているような気がしてくる。その「道というもの」がどのようなものなのか、他の用例から理解を試みたい。

道という理から聞き分け

個人の身上や事情から伺われた「おさしづ」の場面では、往々にして、願い出る側は、どうであろうか、こうであろうかと思いつつ悩んでいる場合が多いと思われる。

「さあ〜何故こうなる〜、又なあ〜と思うやろう。思う心違うで。人間心よく聞き分け。道という理から聞き分け。道というは通りよいもの、又通り難いもの。何よの心道の心治まりあれど、後々という。これどうもならん。」(さ35・9・18 増井幾太郎娘マスへ身上願)

ここに挙げた「おさしづ」はまさにそうした願いの人に下された言葉である。そこでは心の治まりが問題にされ、「道という理から聞き分け」と言われている。よく似たような用例に次のようなものもある。

「皆多く立ち寄る理は道の理から成り立ったもの。何ぼ遠く所でも運ぶ理は、道の理から何でも無い事であろうまい。」(さ35・10・7 諸井政一身上九月二十九日一時迫り切り又それより日々と送れるに付分教会役員一同揃うて願)

「いかな事情も道の成り立ちから心の理、成り立ちの理聞き分け。」(さ37・11・27 増田亀次郎身上願)

人が遠くから運んでくるのも「道の理」から成り立ってきたものだとされ、また、現在のいかなる事情も、「道の成り立ち」から心の理を聞き分けるようにと諭される。

古き物調べてこうとするは、天の理の道

それでは、聞き分けるべき「道というもの」あるいは「道という理」とはどういうことであろうか。第6巻の個人の身上・事情の「おさしづ」を見る限り、「道」による論しでは、心を治めるために大きく二つのことが説かれている。一つはこれまでのこと、もう一つはこれから先に関することである。

「所々国々それぞれ、元という、これよく聞き分けてくれにやならん。又治まらにやならん。道の理この理治め。どうでも運んで事情万事の理に治め。万事の処に象と、何よの事どうであろうこうであろうと古き物調べてこうとするは、天の理の道であろう。」

(さ36・9・18 日本橋分教会長中台庄之助妻たけ出直し後、役員の前会長十年祭執行に付、増野正兵衛出張心得の願)

ここに言われるように、所々国々の教会や信者には、その元となつたものがある。たとえば、教会の礎を築いた先人であり、さらに遡れば、教祖のひながたが元にある。そうした「古き物調べて」今の心を治めて進むのが、「天の理の道」であると説かれている。

次の「おさしづ」も、「古き物調べて」と言われるのと同様のことが説かれていると思われる。

「この道は三年五年のように思うて居る。世界を思うてみよ。この道は容易ならん処から付け掛けたる道、これを失わぬよう。……どう、あこまで心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。あれでこそ真の道であると、世界に映さにやならん。」(さ35・9・6 永尾よしゑ身上願/押して、『親ありて子あり』と仰せ下さるは、本席の御身上に掛かります処をあちこちと掛かります処、身上御救け願います)

「この道」は3年とか5年とかで出来たものではない。容易ならん処から付け掛けた道であることを失わず、それに基づいて「頼もしい道」を作ってくれと説かれている。

道は末代

このように、古いこれまでの道を強調されるのは、これからの道のためである。

「よう聞き分け。この道は大抵で出けた道やない。これまで一日の日にとってどうなろうと思うた日もあろう。この事思えばどんな事も楽しんで永く心持って急いではならん。……急えてはならん。生まれ更わり、生まれ更わり〜まで聞き分けて楽しんでくれるなら、長く事であらう。長く理であらう。運んだ理のこうのうは、末代の理と思うてくれ。」(さ36・2・11 畑林為七五十四才眼の障りに付願)

先長くというのは、人間の一生どころか、生まれかわりしてまで先、末代までの長い心になって、そうした先を楽しみに、着実な歩みをすすめるように言われる。このことは、ほかの身上伺いの「おさしづ」でも繰り返し説かれている。

「道は末代、理は末代、この理持つてくれ。いかなさしづも籠もりある。どんな事も、世上の理見てたんのう治めてくれるよう。」(前掲、さ35・10・7)

「道の理一代切りと思う。道は末代、人間は一代。安楽一つの理、日々思う心間違つて居る。一つ年限楽しんでくれ。又候こんな事と心を持って、一代の理でない、末代道の理はころつと取り替え。」(前掲、さ37・11・27)

「さあ〜皆思い出して運べば道は万劫末代という理、よう聞き分け。道という道、事情一旦心に嵌まり切つたら、どんな事でも心に治めにやならん。治めば楽しみ、楽しめば未だ暫く、とも言う。」(さ39・3・28 南紀支教会長下村賢三郎六十二才身上願)

このように、道は末代とも理は末代とも諭され、徹底して先永く楽しみ道を歩む心を治めるように説かれている。

以上、第6巻の個人の身上・事情の「おさしづ」における「道」の用例を確認してきた。そこでは、これまでの「道」を振り返り、容易でないなかに次第に「道」がついてきたことを思い、「今世一代だけでなく末代までも」という心を定めて、先を長く楽しみに通ることを繰り返し諭されている。